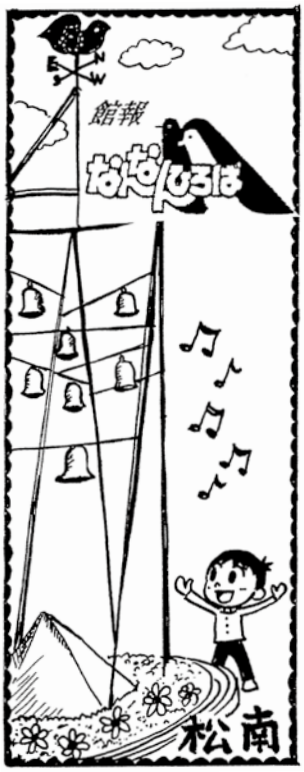


コロナ禍の１年

令和２年度はコロナ禍で自粛の日々。町会や地区や学校行事は中止・延期・縮小となり、倒産・失業・減給など生活も傷み、町の様子も変わりました。仕事や学業はオンラインにシフト、休日さえ「巣ごもり」生活でした。今号は、コロナ収束を願って、「編集委員の声」特集です。

巣ごもり

待合室ディスタンス

私は、一年以上、県外に足を踏み入れていない。県内では、佐久市、安曇野市、山形村だけです。

スポーツ観戦が楽しみで、球場、スタジアムに足を運んでいましたが、全てを自粛しました。野球は、西武ライオンズ、信濃グランセローズ、高校野球です。パリーグの試合開催地は札幌から福岡まで全国に散らばり、本拠地所沢以外に応援に行く楽しみもあります。信濃グランセローズは創設時からの後援会員で、松本市野球場でビールを片手にメガホンを叩いています。

サッカー松本山雅は、北信越リーグよりアルウィンに足を運んでいました。Jリーグの試合をアウェーで観戦する楽しみもあり、最初にJ1昇格を決めた福岡は最高でした。

そんな日常が消え、巣ごもりしながら、コロナに立ち向っています。

（塩原 保彦）

通所介護施設では

高齢者施設で働く私にとっては、コロナ感染しないように気を使う日々。

施設では感染防止対策として、換気のため常時窓を開けること、消毒、マスク着用を厳守しています。でも中にはマスクを嫌がる人もいて、悩むこともしばしば…。

そんな中、私の楽しみができました。良さそうなマスクを購入することです。不織布マスクにウレタンマスクや冷感タイプマスクと、今ではコレクションとなりつつあります。中には利用者家族の作ったマスクや国から支給された不織布マスクもあります。

大変な日々ですが、コロナ感染に気をつけながら、こんな時だからこそ、利用者と楽しく元気に過ごしています。

（藤森 俊男）

新しい日常？

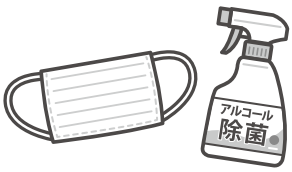
コロナ禍が広がり、私たちの日常生活や働き方などが急激に変わりました。買い物の回数は減り、仲間との旅行や飲食なども、今は我慢の時です。

職場では、飛沫（ひまつ）感染防止板を設置。来客の方へのお茶出しもなく、マスク着用での会話が当たり前です。場所によっては検温カメラで体温測定。消毒を行ってから用事を済ませ、電話で済むことは電話のみの対応となり、できるだけ人との接触を控えるよう心掛ける日々です。

日常風景に

見えない感染症に恐怖を感じながら、人と人とのコミュニケーションが直接とりにくくなったこの一年、一日も早く過去の出来事になってほしいです。

（村口 淳子）



議会活動も大きく変化

新型コロナウイルスの影響は議会活動の現場へも例外なく及んでいます。議員の仕事は、多くの皆さんにお会いし、様々な課題・問題を把握しながら、議会という場でその改善、解決を図ることと言えます。今年度はその基本中の基本である、人と会う事を大きく制限されました。ごく限られた状況ですが現場の声をお聴きし、活動を進めています。

さらに研修や会議のあり方についても、多くの制約が課せられています。研修はほぼ全てがインターネットによるオンライン化になり、物足りなさを感じています。議場での本会議も、出席者を制限し密状態を回避しています。

多くの市民の皆様と自由にお会いし、闊達（かったつ）な意見交換ができる日が一日も早く訪れることを願う今日この頃です。

（近藤 晴彦）

オンラインによる議員研修

子ども達は…

学童クラブ勤務の立場で、コロナと向き合っています。

職員は、勤務に入ると手洗い、消毒。トイレのドアノブを布で巻く。前日から塩素消毒している台ふき等を洗って干す。一時間ごとに窓を5分間全開、スプレーでテーブルを消毒、以上がルーティーンです。

子ども達は、①個人専用の洗剤で手洗い。②持参した体温計で検温し、健康カードに記録してもらう。

図書館クリスマス

一連のルーティーンの後、宿題や遊びに移ります。おやつ前にも、手洗い・スプレー・検温。

会話の禁止。「テーブル3人」も決まっています。子ども達はこのルールを確実に実行してくれるので、習慣づいた今では、黙っていてもきちんと行動してくれます。

（百瀬 壽）

新型コロナウイルス

世界中を巻き込んだパンデミックが生じ、猛威をふるって一年余り。一向に出口が見えません。まさに真っ暗なトンネルのど真ん中状態で、多方面にあらゆる影響が及んでいます。我が町会も公民館活動であるイベントの大半が中止を余儀なくされ、心を痛めている方もいると思います。

これからの行方は、ワクチン接種が大きなカギを握ると思います。是非、マスクのとれた笑顔が見られる日常を待ち望みます。

（児嶋 正武）

コロナウイルス（異論？）

このウイルスは自然生成とは考えにくいという、人工ウイルス説もあります。また風邪対策と同様、トイレ清掃など接触感染対策に努めれば、飲食店の自粛も不要との説もあります。こんな時こそ、異論にも耳を向けたいものです。

コロナ克服の努力、助け合いの報道が、連日されています。失いたくない我が国の良風美俗を感じます。

（川上 磊象）

サヨナラ　旧南松本駅

断捨離（だんしゃり）

生活が激変する中、家にいたこともあり、見て見ぬふりをしていた納戸（なんど）や部屋の家族分ある大量の物の断捨離を始めてみました。でも、なかなか終わりが見えません。

思い出の品に手が止まり、懐かしみ、そこから処分か否かの選択…決別。大量のゴミも出ました。市の処分場も混雑し、リサイクルショップも土日は混んでいました。

わが家の古本やCD等もお小遣（づか）い程度の現金に換わり、夫婦でカフェを探してコーヒー代に消えました。

寒さで中断していましたが、そろそろ再開しようと思います。

（H・H）

試されていること

首都圏に感染が広がっていた頃、東信のある町の蕎麦（そば）屋さんに入りました。フェイスシールドを着けた店主は、来客に一々居住地を尋ね、それが首都圏だと、「東京？いらね！」「埼玉？いらね！」と問答無用、追い返すのです。感染を恐れる気持ちはよく解ります。しかし、この対応は明らかに間違っていると思いました。

同じ頃、パチンコ店に休業を求め、応じない店は店名を公表するという動きがありました。密集回避のための策ですが、依存症の人には朗報です。知らされた我々は、どうしたら良いのでしょう。「ひどい店だ」と皆で罵（のの）れというのでしょうか。羽の抜けた仲間をつつきあう鶏のように。

「コロナに感染したら、何が一番不安か」と問うた世論調査の結果を目にしました。「周囲の人の目」という答えが、最多でした。

コロナ禍は、人智や科学の力が試されているような気がします。でも、それ以上に、人としてのあるべき姿が試されている気がします。

（石川 博子）

コロナ禍の陰で

とげとげ、ぎすぎす…、優しさが見えなくなったコロナ禍。松南地区公民館では、夏から「まちかどアート展」を始めました。地域の普通の人達の作品発表の場を設けたのです。中学生の樹木や自画像などの水彩画展、プロ級の白鳥写真展、「放課後等デイサービス」に集う子ども達の絵画・工作展、新人女性のチョークアート展です。

アートは、言葉以上に響きます。白鳥への熱い思いがストレートに伝わる写真、子ども達の飾り気のない表現が芯に届く絵画、斬新（ざんしん）な画法が強い印象の新アートなど、いずれも感動的で好評でした。

普通に生きる姿を応援する、小さな試みです。

（白澤 幸男）

信明中学校授業作品展